

## 随想

### 近頃ふと思い出すこと（父の日に）

昔農医院 昔 農 輝 夫

つい先日名寄市立病院医誌編集委員会から今年度の投稿依頼状が届いたが、生来文章を書くのが全く不得手なのでたとえ出来上がっても「旧陸軍時代の癩丸出しの電報文そっくり」と常々家内に批判されるのですぐに尻込みしてしまう。5月には母の日が、次いで6月には父の日と続く。長男と次男の両夫婦から結構なプレゼントが恒例になって届けられる。毎年こんなに散財をかけさせて済まないと思ってしまう反面又私の心の何処かで心待ちしているのか非常に嬉しいことである。子供の出生から成育時期そして続く結婚と喜びも大きいとその苦勞の多かった過去を顧みると、その長きに亘って母親としては出来得る限りの扶育に専念していた妻の努力の姿が彷彿としてくる。父親たる私などの3倍も4倍も折りにふれて母親に感謝して欲しいのである。あの名作有吉佐和子の“恍惚の人”の主人公茂造となることなく私共は生きがいを求めて仕事を続け心身共に健やかな老後を過ごし、出来得る限り子供達の負担にならないよう実り多い人生を全うしたいと常々願っている。

一昨年正月に北大同期の心友Y君の奥様が癌のため亡くなられて、その一周忌に家内共々札幌の法事に出席する機会があった。その御斎の座席は先方の御配慮で北大26期生ばかりが集まるように設けられていた。御料理とアルコール類が出てくるうちに話題もテンポも次第に早まり不謹慎にも法要の席ということ忘れてまさにクラスの座談会調になってしまった。クラスで自他共に認める最年少のS君が「俺が一番若いんだから皆の骨は拾ってやるから安心せい」と気前のいい科白を吐いて楽しませていた。その後半年も経たずに悪性リンパ腫と診断され、北大出身医局の十分な治

療の甲斐もなく約束も果たせず今年初めに遂に他界してしまった。彼は海軍兵学校に学び頑健そのものの好漢であり突然の悲報に驚愕し、今更ながら僧侶の説く諸行無常の真理を実感したことである。

松濤弘道師の仏教名言365日の本の中にも「昔から一病息災とは日頃の多忙にかまけて見失いがちな自己を反省する絶好の機会ととらえ、一つくらの持病があった方が健康に留意するようになり、反って長寿を保てるものである。病気は患者自身の受けとめ方如何で人生が明るくも又暗くもなる。病いに感謝して“病は気から”と頑張れば回復も早くなろうと締め括っている。最近の医学雑誌ならざる週刊誌にも“笑いの効用”で癌が軽快したとか書いてあったが。昨年号の随想欄に岡崎望先生が父親先生の肺癌を看取っての最期に接し一病息災のススメの一文を投稿されている。彼先生とは私はクラスメートであっただけに読み終えて惻隱の情切なるものがあつた。最近「死の四重奏」と言われる糖尿病、高血圧病、高脂血病、肥満などその一つひとつは珍しくもない病気が共存するときは冠動脈疾患がおこり易く死に至ることが多いと言われる。考えてみるとこれらは全く同根の疾患で案外平氣に過ごしているが新たに癌の存在を指摘されたとき人間は本当に一病息災などと安閑平穩な気持ちで過ごせるものだろうか。“笑う門には福来たる”という心境は普通の人には望むべくもない。平常心の確固としており且つかなりの悟道に達した人でなければ何とも難しいものと思われる。

私は20年前に大腸癌を患い大手術の結果真に九死に一生を得た経験がある。約2年間は毎月2回、その後3年間は4週に一回と術後経過観察の

ため少なくとも5年間は一度も休むことなく市立旭川病院に通院を続けた。途中の和寒町大成地区の国道脇の春の山桜の咲いているのに気付かずには過ごしたことを考えるとどんな心理状態で通院していたのか。助手席の妻も亦風景などには全然気が廻らなかったといい、交通事故も起こさずにいたのが不思議でならない。

昭和28、9年頃北大内科再来係をしていた頃、先輩がレ線写真から明瞭な肺結核症と診断しながら患者自身には勿論、娘に付き添う母親にも「肺尖カタル」とか「肺浸潤」とかムンテラして肺結核とは如何にも違うように告げていた。今考えると手術治療が全盛時代で且抗結核薬も現在のように効果も充分でなく、母親に告知して業病のイメージを与えるのを取って伏せていたもので丁度、今日の癌の告知の問題の是非とオーバーラップする。現在では抗結核薬の格段の進歩でそんなに気遣いなく患者に明白に告知出来る時代になった。

私は戦前陸軍士官学校に学んだ経験がある。そ

の当時は“人生僅か50年、但し軍人は半額”と言ったような死生観を簡単に受入れて勉強していた。戦後医師となり職業もすっかり変わり患者に接し又私自身も死と完全に向き合った大病を体験して既に70才を優に超えて人生を楽しむことが出来るようになった。旭川で外科手術を担当して下さった先生方お二人は既に亡くなられて14年も過ぎ心から御冥福をお祈りしている。最後に先生の御診察を受けた時に「今はもう5年間経過して癌の再発の心配から略く完全に離脱出来たと思うがこれからは初老期を迎えての又別の病気の発症に充分注意するように」との心温まる言葉をいただいた。これは前記の所謂「死の四重奏」と又治癒極めて困難な「アルツハイマー型痴呆」にならないようにとの「メッセージ」と思えてならない。

有能卓越した名医との邂逅が私の運命を決定し諦めていた寿命までも延長させていただいた幸運に心から感謝し、一日も忘れることのない毎日を過ごさせていただいている。

(平成9年7月7日記)



りょうけん座の渦巻き銀河・M51

\*地球から光のスピードで向かったとしても、2500万年かかる距離にある銀河で、大小二つの銀河が接近したため、子持ち星雲とも呼ばれています。

撮影：名寄市立木原天文台 佐野 康 男